

武勲詩定型表現と動詞 OïR

前田 弘 隆

0 本稿は、「武勲詩 (*Chanson de geste*)」の定型性と動詞とのかかわりを、初期のいくつかの武勲詩作品における動詞 OïR の分布状況の検討を通して、確認しようとするものである。ここにいう定型性というのは、武勲詩が見せる「繰り返し」への著しい好みをいったものであるが、ここでは特に「定型表現 (*formule*)」と呼ばれる同一詩句の「繰り返し」という技法上の特徴のことをいう。また、動詞の分布状況というのはその不定詞を含んだ活用形の現れ方のことをいう。

以下では、まず、武勲詩の形式上の特徴、特に定型表現とは何かを簡単に振り返り、その上で動詞 OïR の分布状況を示す。

1 武勲詩は、11世紀末に現れた「ローランの歌」を嚆矢とする聴衆の前で歌誦された叙事詩に与えられた呼称であるが、その形式と扱う内容によって比較的厳密に定義できる中世文学の一ジャンルであると説明される。

事実、その内容についていえば、中世期すでに Jean Bodel が *Chanson des Saisnes* (12世紀末)の冒頭で、俗語文学に「ブルターニュもの」「ローマ (古代)もの」「フランスもの」の三様あることを指摘している。武勲詩はこの「フランスもの」に相当する。また、Bertrand de Bar-sur-Aube は、*Girart de Vienne* (13世紀初頭)の冒頭で、フランスに伝わる «gestes» には、Charlemagne を中心に据える一連の作品からなる「国王の Geste」、Guillaume d'Orange を巡る作品群の「Garin de Monglane の Geste」、それ以外の「Doon de Mayence の Geste」があると紹介している。今日的な文学に関する概念が成立する遙か以前の中世期にあって、こうした比較的明確な内容の類似性・統一性にもとづくジャンル化が意識された背景には、武勲詩に顕著な形式上の特徴が寄与しているのは疑いえない。それは、「ブルターニュもの」や「ローマ (古代)もの」が一般に一行8音綴の詩句が2行ごとに脚韻を踏む形式であるのに対して、武勲詩は次のような極めて異なっ

た結構上の特徴を持っていたからである。

- 1) 「詩節 (laisse)」と呼ばれる行数不定の 10 音節の詩行のまとまりを連ねる
- 2) 詩節内の行末は全て同一の強勢母音を持つ (半階音 (assonance))
- 3) 各詩行は前半 4 音節と後半 6 音節、あるいは前半 6 音節と後半 4 音節とを分かつ「句切れ (césure)」を持つ

こうして、半階音として行末に現れる同じ音色の母音の「繰り返し」が詩節のまとまりを支え、その母音が別の母音と交替することによって次の詩節への移行を耳に響かせ、先行詩節の独立を印象付けていた。

「ブルターニュもの」や「古代もの」とははっきりと異なった相貌を武勲詩に与えたに違いないこうした特徴は¹⁾、武勲詩が、特に初期の作品においては、多くの聴衆を前にして歌誦されたというその受容環境と不可分であった。J. RYCHNER は、詩節や半階音の採用という武勲詩の形式は、作品の口演にまつわる «oralité» と実演場面で必要とされたであろう「即興性」— 詩句の「度忘れ」とその場での取り繕いや、聴衆の反応に答えようとしての詩句の変更など— に由来するものであると主張する²⁾。彼は、こうした視点から武勲詩の形式・技法を分析し、詩節の個別化の更なる標識として、一般に詩節の始まりには、その詩節で物語られる場面や事件の中心に座る人物を導入する、あるいは、これから展開する物語の前提として先行詩節の内容を要約する «vers d'intonation» が現れ、詩節の最後には、その場面を締めくくる «vers de conclusion» が位置することを明らかにしている。一つの詩節の中では、一人の中心になる人物を巡る一つの場面が語られるので、結局、詩節の形式自体に加えて、詩節の冒頭と末尾の詩句、また、口演者の声に乗って展開される一つの場面、さらには、その詩節を歌誦するメロディーという諸点が、一つ一つの詩節の個別性を際立たせる要素として機能していたことになる。かくて武勲詩は、ひと繋がりストーリーの中から一つ一つの場面や事件を切片化した詩句を積み重ねて、武将の世界、騎士の世界を物語っていったのであるが、こうした詩節の積み重ねは、一続きの歌誦の際に詩節ごとの統一性と独立を際立たせ、また、各詩節で歌われた事柄の輪郭を浮き彫りにするのに効果的であったことが予想される。

ところで、Rychner は、こうした形式上の特徴に加えて、同一、あるいは、「ほぼ」同一の詩句の「繰り返し」にもとづく技法上の特徴を明らかにしている。「詩句

連鎖(enchaînement)」「詩句分岐(reprise bifurquée)」「平行詩句(laisse parallèle)」「類似詩句(laisse similaire)」である。

「詩句連鎖」は、先行詩句の末尾で語られたことを«sous une forme plus ou moins semblable»³⁾で繰り返すもので、その効果として«Il lie les laisses sur le ligne du récit : <-figure omise> tout en accusant leurs contours, étant ainsi à la fois pont et fossé»⁴⁾と説明される。「詩句分岐」は、先行詩節の末尾ではなくその途中の詩句を繰り返すことで次の詩節を歌い始め、«à partir du même moment, du même point, se déroule deux fils différents»⁵⁾という多眼的は場面描写をもたらす技法である。「平行詩句」というのは、先行詩節で取り上げられたテーマを次の詩節の冒頭で繰り返し、同じ場面を描写しながら、その詩句の結びでは、例えば話し手が変わって筋の展開に切っ掛けをもたらすというような、«variations»に繋がる。つまり、«la seconde laisse, après la reprise similaire au début de la première, mène le récit plus loin qu'elle»⁶⁾ということであり、テーマの繰り返しによってその同一性を強調しつつ、筋の展開速度を抑えながらも、聞き手を話の流れに誘うという手法のことである。「類似詩句」は、『ローランの歌』におけるローランの死を歌う詩節の構成が典型とされるが、ここでは、詩節173で業物の自分の剣を異教徒の手に落ちることがないようにと岩に叩きつけて砕いた後、詩節174は«Ço sent Rollant que la mort le tresprent»⁷⁾で始まり、また、同175も«Ço sent Rollant de sun tens n'i ad plus»と歌いだして瀕死のローランを描き、最後に詩節176で«Li quens Rollant se jut desuz un pin : /.../L'anme del cunte portent en pareis」と彼の昇天で結んでいる。これらの詩句はローランの死そのものしか明らかにしないが、英雄の死を繰り返し畳み掛け、その劇的効果を伺う技法といえよう。

武勲詩はその名に«chanson»とあるように、歌われた叙事詩だと説明される。しかし、«chanté»の代わりに«psalmodié»といわれることもあるように、そのメロディーは今日我々が考えるような歌い上げのような技巧のない単調なものであった筈である。したがって、詩節の採用、技法上の工夫は、音楽の支えにこうした効果を求めることはできないという口演環境から生じたものと考えられよう。

2 1で、武勲詩に見られる定型性として、詩句をまとめる半階音の「繰り返

し」、詩節を構成する技法としてその連結法を簡単に振り返った。特に詩節構成上の工夫は、4つの技法のいずれも、突き詰めれば詩節の中の個々の詩句の「繰り返し」を契機にしていることが分かる。こうした詩句の「繰り返し」は「定型表現」として知られ、Badelによれば、「同じ内容を表す類似の表現群のことで、それらは統辞論上同一の構造を持っており、各行、特に半句（括弧内略）のリズムを守るため音節数は同一である」⁸⁾ 詩句のこととなる。こうした定型表現は、当然、口演者の記憶を助ける性質のものであるので、口演環境と武勲詩の結びつきを強調する立場に立った Rychner は、武勲詩の個々のモチーフと定型表現の繋がりに着目し「騎士叙任 (Adoubement d'un nouveau chevalier)」に始まり、城の窓辺に佇み人がやって来るのを目にするといった「城の窓辺」まで、24のモチーフをあげている。

この「城の窓辺」のモチーフの相当する定型表現を Badel は「平行詩節」の冒頭行の例として挙げているが、それを、定型表現の例としてここに示す⁹⁾。

Or fu Guillelmes as fenestres au vent, (*Prise d'Orange*, Laisse 4)

Or fu Guillelmes as fenestres del mur, (*Ibid.*, L.5)

Or fu Guillelmes as fenestres le ber. (*Ibid.*, L.6)

前半句4音綴部分の「Or fu Guillelmes」と後半句4音綴目までの「as fenestres」まで完全に同一であるが、行末の2音綴文については、半階音の要請から異なりを見せている。

Rychner から、「拍車がけ」のモチーフについて、数例挙げておく¹⁰⁾。

Sun cheval brochet des esperuns d'or fin (*Chanson de Roland*, v.1245)

Le cheval brochet des esperuns d'or fin (*Ibid.*, v. 3353)

Brochet le bien des esperuns d'or fin (*Ibid.*, v.2128)

同じ半階音を持つ詩節に現れた詩行なので、後半句については、「des esperuns d'or fin」と完全に一致しているが、前半句については「brochet」を巡って所有形容詞が定冠詞に変わり、あるいは目的補語が代名詞化されていたり、前2例には現れてはいない副詞が現れていたり、また倒置された語順が採用されていたりするが、こうした小異は定型表現の埒内に収まる現象とみなされている。

3 武勲詩として最古の『ローランの歌』が、最も完成した形を示すというこ

とはよく指摘されるところではあるが、Bordas 版「フランス語文学辞典」¹¹⁾によれば、これまで簡単ではあるが振り返って見てきた特徴を十全に使いこなしているのは『ローランの歌』のみであると指摘されている。そこで、以下では、まず、『ローランの歌』について、本稿の目的である動詞 OïR の現れ方を確認し、定型表現との関係を確認したい。

以下に挙げた例文は、この作品の中から採集された動詞 OïR の活用形を含む詩行の全てである。活用形の〈法・時制・人称〉ごとに行数と例文を併せて示した。なお、下線の施してある例文は、作中人物にではなく、口演者が聴衆に向けた科白であることを示している。

Inf. OïR	(412): Pur les nuvels qu'il vuldreient oïr. (455): Vos le doüssez esculter e oïr.» (522): De Carlemagne vos voeill oïr parler.
Pr.ind.1 OI	(1768): Ce dist li reis : <u>Jo oi le corn Rollant!</u> (2003): Dist Oliver : « <u>Or vos oi jo parler</u> »; (2108): Jo oi al corner que guaires ne vivrat. (2714): Dist Bramimunde : « <u>Or oi mult grant folie!</u> » (3135): Dist Baligant : « <u>Or oi grant vasselage.</u> »
Pr.ind.3 OT	(302): <u>Quant l'ot Rollant</u> , si cumençat a rire. AOI. (601): <u>Quan l'ot Marsilie</u> , si l'ad baiset el col, (745): <u>Quant l'ot li reis</u> , fierement le regardet, (761): <u>Quant ot Rollant</u> , qu'il ert en la reregarde, (817): De .XV. lius en ot hom la rimur. (1196): <u>Quant l'ot Rollant</u> , Deus ! si grant doel en out ! (1224): Ot le Oliver, sin ad mult grant irur ; (3644): <u>Quant l'ot Marsilie</u> , vers sa pareit se turnet,
Prf.ind.1 Oï	(1386): <u>Ne l'oi dire ne jo mie nel sai</u> (2863): D'une raison oï Rollant parler :
Prf.ind.3 OïT	(499): Quant l'oït Guenes, l'espee en ad branlie ; (751): Li quens Rollant quant il s' oït juger, AOI.

- (1634): Sun ceval brochet, ki oît del cuntence.
- (1757): Karles l' oïte ses cumpaignes tutes.
- (1767): Naires li duc l'oïd, si l'escultent li Franc.
- (1788): Karles l' oïte ses Franceis l'entendent,
- (3145): Par la spee Carlun dunt il oît parler
- (3612): Quant Carles oît la seinte voiz de l'angle,
- Prf.ind.6 OÏRENT (1005): Granz est la noise, si l'oïrent Franceis.
- (1756): Granz .XXX. liwes l' oïrent il respundre.
- (2693): Vers le paleis oïrent grant fremur ;
- (3524): Sunet la cler, que si paien l' oïrent ;
- Impf.sub.3 OÏST (1181): Ki dunc oïs «Munjoie» demander,
- (3484): Cez blancs osbercs ki dunc oïst fremir,
- Ftr.3 ORRAT (55): N'orrat de nos paroles ne nuveles.
- (1052): Si l'orrat Carles, si retournerat l'ost.»
- (1060): Si l'orrat Carles, ferat l'ost retourner,
- (1071): Si l'orrat Carles, ki est as porz passant.
- (1703): Si l'orrat Carles, ki est as porz passant.
- (1714): Jo cornerai, si l'orrat li reis Karles »
- (2294): Ne l'orrat hume, ne l'en tienget por fol.
- Ftr.4 ORRUM (424): Respunt Marsilie : «Or diet, nus l'orrum !» AOI.
- Ftr.5 ORREZ (336): «Seignurs» dist Guenes, «vos en orrez noveles ! »
- (423): Par lui orrez si avez pais u nun.»
- (927): Asez orrez, laquele irat desure.
- (2023): Jamais en tere n'orrez plus dolent hume !
- (3248): De plus feluns n'orrez parler jamais.
- Impr.5 OËZ, OIEZ (15): «Oëz, seignurs, quel pecchet nus encumbret :
- (2657): «Oiez ore, franc chevaler vaillant !
- P.p. OÏT (321): Oït l'avez, sur vos le jugent Franc.»
- (1630): Ben ad oït que Franceis se dementent ;
- (2132): De cels de France les corns avuns oït :

ここに挙げられた例文の中で、四角囲みの部分が、OïR を含む定型表現と認定される部分である。つまり、語彙上・統辞論上・音綴リズム上の同一性・類似性を考慮し、「繰り返し」現れたものをそう認定したということである。モチーフとの対応関係は考慮していない。

上の例文の比較から、定型的な表現を含む詩句を確認すれば、1) 直説法現在 1 人称単数形では、5 例中 4 例; 2) 直説法現在 3 人称単数形では、8 例中 6 例; 3) 直説法完了 3 人称単数形では、8 例中 3 例; 4) 接続法完了 3 人称単数形では、2 例中 2 例。ただし、この詩句は口演者の感想を作中に持ち込んだ科白と解釈できる部分である; 5) 直接法未来 3 人称単数形では、7 例中 6 例; 6) 過去分詞形では、直説法複合過去 3 人称単数形で、3 例中 2 例ということになる。文学作品という条件の下では活用形の分布が偏在してしまうので一概には言い切れないが、定型表現が単数形とともに現れている点が非常に目を引く。

また、表現の構成で注目される点を整理する。1) 直説法現在 1 人称単数形 [Jo oi le corn Rollant / Or vos oi jo parler / Or oi mult grant folie / Or oi grant vasselage] については、[+(+) oi (+) ++] という構成であるが、先頭の母音位置では Or が優勢となる（構成の+は母音を示し、(+) はオプショナルな母音であることを示す。「Or vos oi」の様に «oi» の前に更に母音が来る場合は後ろの(+) は実現されず、音綴数の原則を踏み越えない); 2) 直説法現在 3 人称単数形では、[Quant l'ot ++] が優勢であり動詞に続く 2 母音の位置には倒置による動作主語としての人物が現れる; 3) 直説法完了 3 人称単数形では、[+ + l'oït] となり、先頭の 2 母音の位置には人物が現れる。定型的表現としての確認の際には指摘していなかったが、ここには、[Quant l'ot ++] のヴァリエーションとして同定できる «Quant l'oït Guesnes / Quant Carles oït» も現れている。このうち前者について言えば、動詞 oït の後には母音は 1 音しか来られない; 4) 接続法完了 3 人称単数形では、<ki conditionnel> による条件表現を表すタイプで [ki dunc oïst]。後半句に位置した場合には、動詞の後ろに更に母音が 2 音位置できる; 5) 直接法未来 3 人称単数形では、[si l'orrat +] で動詞の後ろには 1 音節からなる人名、人物名詞が来る。これも、後半句に位置する場合には、動詞の後ろには母音が二つ現れる; 6) 過

去分詞形では、[+ ad oït] となり、先頭の母音位置には副詞が現れる。

続いて、『ギョームの歌』『ニームの搬送』『オランジュ占領』についても同様に OÏR の分布と定型表現と見なされる例を挙げていく。

『ギョームの歌』

Inf. OÏR

- (1): Plaist vus oïr de granz batailles e de forz esturs.
(1131): Plaist vus oïr des nobles baruns.
(1133): Plaist vus oïr des nobiles vassals.
(1175): Plaist vus oïr del nevou dame Guiburc.
(1444): Si apelad cum ja purrez oïr :
(3198): Poeit hom oïr de celui dunques.

Pr.ind.1 OI

- (258): Dist Viviën : «Ore oi parler mastin!»
(1658): Respunt Willame : «Sagement t'oi parler»
(1976): — Niés, dist Willame, sagement t'oi parler ;
(3432): Dist Reneward : «Ore oi parler bricun»

Pr.ind.3 OT

- (1007): Quant l'ot Willame, sin ad sun chef crollé ;
(1328): Quant l'ot Willame, prist sun chef a croller,
(1451): Quant l'ot Willame, vers l'enfant se grundi ;
(1474): Quant l'ot Willame, prist le chef a croller,
(1621): Quant l'ot Willame, prist le chef a croller,
(2194): Quant l'ot Willame, rit s'en suz sun nasel :
(2343): Quant Guiburc l'ot, mult out le quer dolent.
(2597): Ot le Willame, a poi n'esraga de ire :

Pr.ind.5 OEZ

- (3130): Par la bataille dunt vus me oez parler

Prf.ind.1 OÏ

- (1459): «A la fei, sire uncle, unques mais n'oï tel!»
(1533): Respunt Guiot : «Unc mais nen oï tel!»
(1648): Respunt dan Guiot : «Unc mais n'oï tel!»
(1876): Ço respunt Gui : «Unc mais n'oï tel!»
(1968): Ço respunt Guiot : «Unc mais n'oï tel!»
(2271): — A, dist le cunte, unc mais n'oï tel!

	(2316): Ço dist le cunte : « <u>Unques mais n'oï tel</u> !
	(3419): Dist Reneward : « <u>Unc mais n'oï tel</u>
Prf.ind.3 OÏ, OÏT	(1458): <u>Quant l'oï Guï</u> , dunc respunt cum sené ;
	(1626): <u>Quant l'oï Guï</u> , dunc respunt que senez ;
	(1823): Si oït Willame crier en la presse ;
	(2828): <u>Guiburc l'oï</u> , si lle reconuit assez ;
	(3540): <u>Quant il oï</u> que jo ere de halte gent,
	(3549): <u>Guiburc l'oï</u> , si passad avant :
Prf.ind.6 OÏRENT	(2489): <u>Quant cil oïrent</u> del damage parler,
	(2952): <u>Quant cil l'oïrent</u> , si unt Deu merciz.
Imprf.sub.3 OÏST	(2248): Rotes e harpes i oïst hom soner !
Ftr.1 ORRAI	(616): Respunt li quons : «Jo orrai voz raisuns.
Ftr.3 ORRAT	(92): De set liwes en orrat l'em les criz,
Ftr.5 ORREZ	(231): <u>Pur co orrez</u> doleruse novele.
	(1118): <u>Par icels orrez</u> doleruses noveles,
	(3506): — Dame, dist il, or en orrez verité.
Impr.5 OEZ	(294): Franceis respudent ; <u>or oez qu'il li unt dit</u> .
	(2981): Icés cowarz <u>dunt vus m'oez parler</u> .
P.p.	(394): Pur Sarazins dunt il ad oï les criz.
	(453): Jo ai oï Lowis u Willames ;
	(2602): Enz en Larchamp que vus avez oï dire.

1) 不定法。6例中4例。[Plaist vos oïr] この作品には、『ローランの歌』にはなかったプロークがあるため、口演者が聴衆に呼びかけるまさしく「決まり文句」としてのこの表現から詩が始まっている；2) 直説法現在1人称単数形。4例中4例。『ローランの歌』で見たのと同じように [Ore oi + + + +] という形のものが2例あることが目を引く。ここでは「Ore」の代わりに「Sagement」が2例ヴァリエントとして現れている；3) 直説法現在3人称単数形。8例中7例。『ローランの歌』にも [Quant l'ot + +] が現れていたが、この作品では「Quant l'ot Willame」の完全な反復が目を引く。[Quant + + l'ot]は、倒置をしないことによるヴァリエント；

4) 直説法完了 1 人称単数形。8 例中 8 例。《Unc(Unques) mais n'oi tel》; 5) 直説法完了 3 人称単数形。6 例中 5 例。『ローランの歌』では [+ l'oi] タイプの方が優勢であったが、ここでは《Quant l'oi Gui》2 例と《Guiburc l'oi》2 例に分かれる; 6) 直説法完了 3 人称複数形。2 例中 2 例。《Quant cil oïrent》; 7) 直説法未来 2 人称複数形。3 例中 2 例。[Pur(Par) + orrez] 動詞前の母音の位置には代名詞が現れている。なお、この外、気が付くのは『ローランの歌』では 1 人称単数形の主語代名詞 «jo» は《Jo oi le corn Rollant》の形で現れていたが、この作品では直説法未来 1 人称単数形で《Jo orrai voz raisuns》として直説法未来 1 人称単数形とともに現れている。また、《Unc mais n'oi tel》は、『ローランの歌』には見られなかったが、一方、《Si l'orrat Carles》タイプのもは、『ギヨームの歌』には現れない。

『ニームの搬送』

Inf. OïR

Pr.ind.3 OT

- (1216): Si l'en apele, con ja oïr porrez :
- (44): Ot le Guillelmes, s'en a un ris gité :
- (79): Ot le Guillelmes, a pou n'est forsenez :
- (102): Ot le li rois, le sens cuide changier.
- (292): Ot le li rois, s'est vers lui enclinez ;
- (335): Ot le Guillelmes, le sens cuide changier ;
- (459): Ot le Guillelmes, s'en a un ris gité :
- (478): Ot le Guillelmes, s'en a un ris gité ;
- (489): Ot le li rois, s'en a un ris gité
- (604): Guïelins l'ot, si sorrhist faintement,
- (612): Ot le Bernart, son pere, de Brebant,
- (995): Ot le Guillelmes, s'en a un ris gité
- (1001): Ot le Guillelmes, s'en a un ris gité
- (1015): Ot le Bertran, a pou n'est forsenez.
- (1230): Ot le Guillelmes, s'en a un ris gité:
- (1299): Ot le Guillelmes, a pou n'est forsenez.
- (1306): Ot que le Guillelmes, si en fu airé
- (1452): Ot le Guillelmes, a pou n'enrage d'ire ;

- Prf.ind.3 Oï (698): Quant il oï Guillelme ledengier,
 (1079): Li rois Otrans qui en oï parler,
 (1208): Quant il l'oï sifaitement parler,
- Prf.ind.6 OïRENT (657): Quant cil l'oïrent, si sont joiant et lié ;
- Ftr.5 ORROIZ (33): Et dist Bertran : «Ja orroiz veritez»;
 (417): Et dit Guillelmes : «Ja orroiz verité»
 (449): Et dit Bertran : «Ja orroiz verité»
 (889): Et cil respont : «Ja orroiz verité»
- Ftr.6 ORRONT (972): Et il orront le mestre cor soner,
- Pr.sub.5 OIEZ (370): Ge n'en vueil mie, bien vueil que tuit l'oiez.
- Impr.5 OEZ, OIEZ (1): Oez, seignor, Dex vos croisse bonté,
 (380): «Sire Guillelmes,» dist Loois, «oiez :
 (1085): Seignor, oez, que Dex vos beneie,
 (1205): Oiez, seignor, por Deu de maiesté,
 (1315): Oez, seignor, que Dex vos beneie,
 (1352): Oez, seignor, Dex vos croisse bonté,
- P.p. (35): Assez i ai oï et escouté.
 (917): Ne ja par moi n'en iert mençoenge oïe.»
 (1395): Quant oï l'a le barnage repost,
 (1471): Que l'ont oï noz genz qui hors remestrent.

まず全体を見渡して、定型表現の単純な繰り返しに気付かずにはいられない。定型表現にもとづく繰り返しは、表現効果を高めるはずの技法であったが、この作品における単純な詩句の反復は、安易な形式の模倣といった印象を与えずにはおかない。かえって、技法の陳腐化といった現象に連なりかねないという危惧も生ずる。とはいえ、常に変わらぬ枠組みというものが、逆に安心感を醸して人のある特定の世界に引きずり込むということは、ありうる。であるとすれば、商人に変装し荷車を押して敵の町に入り込むといった、およそ豪腕無双の武将ギョームに似つかわしくない計略がテーマとなるこの作品にあって、必要以上に紋切り型の繰り返しが、武勲詩という枠組みへの安心感を生じさせた

ということも考えられよう。もっとも、その結論は、本稿が取り上げる極めて制限的な例から導かれるものではなく、この作品全体にわたる定型表現の分析を経なければならないのは、言うまでもない。

1) 直説法現在 3 人称単数形。17 例中 14 例。[Ot le +] のパターンの多用がまず目を引く。しかも、倒置された主語が、「Guillelmes」あることが、いっそう印象深いものになっている。2) 直説法完了 3 人称単数形。3 例中 2 例。「Quant il l'oï」; 3) 直説法未来 2 人称複数形。4 例中 4 例。「ja orrez verité」で固定している。『ギョームの歌』では、これに類似した詩句は一例しかなかったが、「or en orrez verité」に対応する; 4) 命令法二人称複数形。6 例中 5 例。その中で 4 例が口演者が聴衆に呼びかける「Oiez, seignor, » で固定しており、残り一例は呼びかけ語と動詞の倒置によるヴァリエントと見られる。

『オレンジの占領』

Inf. OïR

(32): Plest vos oïr chançon de bone geste :

(1317): Bien les puet l'en oïr d'une grant lieu.

(1670): Or les regrete com ja oïr porrez :

Pr.ind.3 OT

(51): La mauviz ot et le melle chanter.

(299): Guillelmes ot la parole effraee

(329): Li chetis l'ot cuidiez que ne li poist ?

(496): Guillelmes l'ot si se vet enbronchant,

(538): Guillelmes l'ot si tint le chief enbron,

(559): Guillelmes ot le palés retentir,

(607): Guillelmes l'ot le sens cuide desver ;

(630): Ot le Guillelmes, si commença a rire :

(718): La dame l'ot si gita un soupir.

(800): Guillelmes l'ot si taint comme charbon ;

(842): Ot l'Arragon, le sens cuide desver,

(887): Arragons l'ot, le sens cuide changier ;

(934): Ot le Guillelmes, le sens cuide desver ;

(941): La dame l'ot, s'a de pitié ploré ;

- (1044): Arragon l'ot, a pou d'ire ne font ;
 (1237): La dame l'ot, a pou d'ire ne font.
 (1297): Ot le Tiebautz, si commença a rire ;
 (1359): La dame l'ot, si gita un soupir.
 (1379): Ot le Guillelmes, tot le cuer li esclaire.
 (1439): Quant li mes ot qu'il li convient aler,
 (1482): Arragons l'ot le sens cuide changer ;
 (1556): Ot le Guillelmes, a pou d'ire n'enrage,
 (1565): Ot le li cuens, s'enbronche le visage.
 (1600): Guëlins l'ot, le sens cuide changer ;
 (1744): Ot le Bertran si commença a rire ;
 (1766): Ot le Bertran a pou n'enrage d'ire.
- Pr.ind.6 OËNT** (409): La dedenz oënt les oiseillons chanter,
 (1585): Paien les oënt en la chartre tancier,
- Prf.ind.1 Oï** (424): Dist le portier : «Onques mes n'oï tel !
- Prf.ind.3 Oï** (736): Qu'ainz n'oï tel en trestot son aage.
- Ftr.3 ORRA** (72): Que il orra une novele tel
 (103): Que il orra une novele grant
 (735): Encui orra Guillelmes tel contraire
- Ftr.4 ORRONS** (457): Encui orrons noveles avenanz.»
- Ftr.5 ORROIZ** (158): — Sire, dist il, ja orroiz verité :
 (166): — Sire, dist il, ja orroiz verité ;
 (475): Or orroiz ja com il lor vet disant :
 (577): Et dit Guillelmes : «ja orroiz verité.
 (653): Com vos orroiz se vos vient a talent :
 (753): Com vos orroiz ici avant conter.
- Ftr.6 ORRONT** (644): Que il orront dont il seront dolant.
- Cond.5 ORRIËZ** (246): Lors orriëz les oseillons chanter,
- Impr.5 OËZ,OIEZ** (1): Oëz, seignor, que Dex vos beneie,
 (31): Oëz, seignor, franc chevalier honeste !

- (772): Or oëz ore, franc baron naturé.
 (1470): «Amirauz, sire, fetes pes, si oiez»
 (1523): Amirauz, sire, fetes pes, si m'oiez»
 (1591): «Amirauz, sire, faites pes, si m'oiez»

この作品でも、定型表現を話題にする前にまず、直説法現在3人称単数形の多用が目につく。『ローランの歌』ではこの活用形は8例であった。『ギョームの歌』でも8例である。『ローランの歌』が全体で4002行、『ギョームの歌』は3554行を数える。これに対して、『ニームの搬送』は1486行について17例、『オランジュ占領』は1888行について26例であることを考えると興味深い。これは、『ニームの搬送』の例の検討の際にも指摘したが、定型表現として半句に現れるOÏRの形がほとんどの場合直説法現在3人称単数形で占められるということでもある。『ローランの歌』や『ギョームの歌』から少し時代が下がり、また、広島大学の原野教授がかつて明らかにされたように¹⁰⁾『オランジュ占領』には、武勲詩と呼ぶにはあまりにロマンや抒情詩に近いテーマや描写がこめられている作品としての性格に由来するのであろうか。

1) 直説法現在3人称単数形。26例中24例。[+++ot]と[Ot le++]とが混在し、前者は15例。後者は9例である; 2) 直説法未来3人称単数形。3例中2例。「Que il orra»; 3) 直説法未来二人称複数形。6例中5例。ただし、『ニームの搬送』に見られた「ja orroiz verité」と同一のものが3例。「Com vos orroiz」の形のものが2例; 4) 命令法2人称複数形。6例中5例。これも、その中で2例が口演者が聴衆に呼びかける「Oëz, signor,»で固定しており、残り3例は、命令形が行末で半階音の母音を提供する形のものである。

4 本稿では同一の、あるいは類似の半句が2回以上繰り返されるものについて定型とし拾い上げ、その半句の構成に現れた動詞OÏRの活用形の現れ方を見てきた。それによって、まず、各作品でのそうした「繰り返し」に供される半句に現れた変化形をまとめてみると、次のような結果となる。

- ローラン 1) 直現1単 (4例); 2) 直現3単 (6例); 3) 直完了3単 (3例); 4) 接完了3単 (2例); 5) 直未来3単 (6例); 6) 過去分詞 (直複合

過去3単) (2例)

ギョーム 1) 不定法 (4例); 2) 直現1単 (4例); 3) 直現3単 (7例); 4) 直完了1単 (8例); 5) 直完了3単 (5例); 6) 直完了3複 (2例); 7) 直未来2複 (2例)

ニーム 1) 直現3単 (14例); 2) 直完了3単 (2例); 3) 直未来2複 (4例); 4) 命2複 (5例)

オランジュ 1) 直現3単 (24例); 2) 直未来3単 (2例); 3) 直未来2複 (5例); 4) 命2複 (5例)

これから、半句の構成に利用される変化形の多様さに違いのあるのが見て取れる。それぞれの例数は多くないにしても、『ローランの歌』や『ギョームの歌』は多彩な語形をそうした表現に提供しているといえそうだが、『ニームの搬送』と『オランジュ占領』では4種類しか提供していない。一方、後者二作品では、直説法現在3人称単数形の使用回数の多さが際立つことは、本文で触れた。

ところで、この検討を通じて、興味を最も引かれるのは、次の点である。つまり、ある箇所では例えば「Quant l'ot Rollant」という半句を用いたが故に、次にも同じ表現を繰り返すのだから、同じ様に「Quant l'ot Rollant」という表現を用いると考えれば当然に思えるのだが、「Quant l'orrat Carles」のような動詞の時制や人称・数についてのヴァリエーションが現れないことである。確かに、『ローランの歌』には「Quant l'oït Guenes」や「Quant Carles oït」というように、音綴数を補うために完了形によるヴァリエーションが見られた。あるいは、『ギョームの歌』では「Quant l'oït Gui」という例がある。しかし、「Si l'orrat Carles」に対しても、「Quant l'orrat Carles」というヴァリエーションも見られない。原文では「Cumpaign Rollant, kar sunez vostre corn, / Si l'orrat Carles, si retournerat l'ost.」であって、「Cumpaign Rollant, kar sunez vostre corn, / Quant l'orrat Carles, si retournerat l'ost.」であってはまずいのか。今後、「sous une forme plus ou moins semblable」の程度が問題になろう。

注

¹⁾ 「ブルターニュもの」として、マリー・ド・フランスの「レ」と、「古代もの」

として「エネアス」から例を挙げる。

Marie de France *Laustic* ll.1-6

Une aventure vus dirai

Dunt li Bretun firent un lai:

Laustic ad nun, ceo m'est vis,

Si l'apelent en lur païs ;

Eneas ll.1-4

Quant Menelaus ot Troie asise,

onc n'en torna tresqu'il l'ot prise,

gasta la terre et tote lo regne

por la vanjance de sa fenne.

²⁾ Rychner, Jean, *La Chanson de Geste — Essai sur l'Art Épique des jongleurs*, Genève ; Droz 1955

³⁾ *Ibid.*, p.74

⁴⁾ *Ibid.*, p.80

⁵⁾ *Ibid.*, p.80

⁶⁾ *Ibid.*, p.83

⁷⁾ *La Chanson de Roland*, éd. Moignet, Gérard, Paris ; Bordas, 1989

なお, *La Chanson de Guillaume*

Le Charroi de Nimes, éd. McMILLAN, Duncan, Paris, Klincksieck, 1978

La Prise d'Orange, éd. RÉGNIER, Claude, Pais, Klincksieck, 1986

⁸⁾ バデル, ピエール=イヴ, 『フランス中世の文学生活』原野 昇訳 白水社 1993年, p.173

⁹⁾ BADEL, Pierre-Yves, *Introduction à la vie Littéraire du Moyen Age*, Paris, Dunod, 1969, p.138

¹⁰⁾ Rychner, Jean. 前掲書, p.141

¹¹⁾ de BAUMARCHAIS, J-P., COUTY, D., REY, A., *Dictionnaire des Littératures de Langue Française*, G-O, Paris, Bordas, 1984

参考文献

- 1) 原野 昇『フランス中世の文学』広島大学出版会, 2005年
- 2) BOUTET, Dominique, *La Chanson de Geste*, Paris, Puf, 1993
- 3) BURIDANT, Claude, *Grammaire Nouvelle de l'Ancien Français*, Paris, SEDES, 2000
- 4) DELBOUILLE, Maurice, «Dans un atelier de copistes», *Cahiers de Civilisation Médiévale*, Centre d'Études Supérieures de Civilisation Médiévale III 1960 9, Poitiers, pp.14-22
- 5) JOLY, Geneviève, *Précis d'Ancien Français Morphologie et Syntaxe*, Paris, Armand Colin, 1998
- 6) MÉNARD, Philippe, *Syntaxe de l'Ancien Français*, Bordeaux, 1994
- 7) MOIGNET, Gérard, *Grammaire de l'Ancien Français*, Paris, Klincksieck, 1973
- 8) ZINK, Michel, *Littérature Française du Moyen Age*, Paris, Puf, 1992
- 9) ZUMTHOR, Paul, *Histoire Littéraire de la France Médiévale : VI^e-XIV^e Siècles*, Paris, Puf, 1954
- 10) ZUMTHOR, Paul, «La Chanson de geste : état de la question», *Mélanges de Langue et de Littérature du Moyen Age offerts à TERUO SATO*, Partie 1, pp.97-111, Centre d'Études Médiévales et Romanes, Nagoya, 1973
- 11) *Dictionnaire du Moyen Âge*, Paris, Puf, 2002
- 12) *Le Cycle de Guillaume d'Orange*, Anthologie, «Lettres Gothiques», Paris, Livre de Poche, 1996